知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【日時】平成 26 年 10 月 21 日（火）
午後 1 時 30 分～3 時 30 分
【会場】藤枝市高洲公民館　集会室

1　出席者

・　発言者　焼津市、藤枝市において様々な分野で活躍されている方
６名（男性３名、女性３名）

・　傍聴者　128 人

2　発言意見

	項　　目	頁
発言者１	お茶の振興について	2
2	「藤枝おんぱく」活動報告	4
3	大井川地区の地域活性について	10
4	深海魚漁について	11
5	「せんたく日和」活動報告	16
6	「輪笑」活動報告	17
傍聴者１	知事への応援	26
2	防災教育について	27
3	富士山の名前について	27

＜県知事挨拶＞

皆様、ようこそお越しくださいました。「平太さんと語ろう」となっておりますけれども、こちらに知事広聴というふうになっておりますように、これはこの焼津、藤枝の皆様方のリーダー格の方々からお話をしっかりとお聞きいたしまして、そしてそれをこの地域の発展のために役立てていくということが目的でございます。そうした中、今回、先ほどまで藤枝市長、御一緒に食事をさせていただきましたけれども、焼津市長さんにおかれましては、この広聴会にも御同席いただきましてありがとうございます。そして県議会議員の先生方にも来ていただきましてどうもありがとうございます。皆さん、責任者が聞いておりますので、それでこちらがやると言ったことはやります。またやれないことについての報告もきちっとします。

今日は藤枝と焼津からそれぞれ３人ずつの方に来ていただいておりますので、その発言をお聞きすると。もし時間があれば皆様方とのやりとりもできるかもしれません。２時間しっかりした時間にしたいと思っておりますので、何とぞよろしく最後までお願いを申し上げます。ありがとうございます。

＜発言者１＞

皆さんどうもよろしくお願いします。ではちょっと簡単に私の紹介をさせていただきたいと思います。私は藤枝市で製茶問屋、通信販売・小売店舗の店長を務めさせていただいております発言者１と申します。よろしくお願いします。

では私どもの会社の紹介をさせていただきます。会社は藤枝にあるんですけれども、創業は、私が聞いている限りでは 1791 年、江戸は寛政時代ですね、現在の当主が８代目になります。当主は平成６年に茶業界で毎年行われて、利き茶、要はお茶を飲んだり、香りをかいだりして当てる競技大会があるんですけれども、全国大会で優勝しまして、農林水産大臣賞をいただいております。当社は創業 200 年の利き茶日本一の社長がいるお茶屋ですよというような形で、現在お茶の専門店さんへの卸と通信販売と、４年前に小売店舗をオープンさせていただいております。

当社の取組なんですけれども、今回ここにいらっしゃる発言者２さんが運営をしていただいている体験型プログラムのイベント「藤枝おんぱく」の参加と、あと藤枝のまちゼミ、お店の人が教えてくれる「得する街のゼミナール」というような形で、こちらも今進めております「藤枝おんぱく」の方に積極的に参加をして、やはり地元のお客様にお茶をもっ

と知っていただきたい。

藤枝ももちろんお茶の生産地ということなんですけれども、意外と一般のお客様がお茶を知らない方が多いんですね。基本的なお茶の入れ方、あとはお茶の保存方法とかですね、そういったことを知らない方もまだまだたくさん地元にもいらっしゃるので、やはりこういった地域の人たちにもっと関わっていきたいということで、「まちゼミ」とか、「おんぱく」とか、そういった今取組をしております。

商品なんですけれども、商品開発等は現在藤枝市と都市間交流のある北海道の恵庭市と商品開発をいろいろしておりまして、恵庭市で現在、藤枝のお抹茶を使ったソフトクリーム、こういったものを今、道の駅等で販売をしていただいております。現在ベーカリー工房においては抹茶を使ったシフォンとか、そういったものを恵庭市で開発をしていただいております。

当社では、静岡県産業振興財団、公益財団法人になるんですけれども、そちらの食品等開発研究会において、恵庭の特産品でエビスカボチャというものがあるんですけれども、こちらを使いまして新しい商品の方の開発をしております。

この財団で開発をしている商品、ちょっとまだ詳しくは公表できないんですけれども、新しい静岡のお土産になればなと思って、来年２月の販売をめどに商品開発を県の方と進めさせていただいております。

当社も創業は非常に古くて 200 年、静岡のお茶屋としては非常に古い創業になります。創業は非常に古いんですけれども、積極的に新しい商品の取組というものをやっております。

ちょうど先日、別件でまた新しい話が挙がったんですけれども、静岡といえばやはり富士山、あとサッカー、でお茶があると思うんですけれども、今度お茶とサッカーをコラボして商品をつくりたいと。昨日ちょうど話が出てきたんですけれども、そういった形で今後商品開発の方を進めていきたいなと思っております。

県の方にぜひ私の方からお願いしたいことは、なかなか急須がなかったりとかの理由で、やはり若い世代の方がお茶を飲まなくなっているというのは非常に聞きます。若い世代に、やはりこの静岡からお茶のアピールをもっと是非していただきたいと思っております。静岡県立大学の先生のお話によりますと、お茶にはすごくやはり若い方も興味は持ってくれているよという話はよく聞きます。

実際、私どもの店舗の方はスイーツがあるということで、比較的若い消費者の方も来て

いただいているんですけれども、やはり 20 代、30 代の方にお茶の話をしたり、実際に接茶をすると、非常に興味を持って熱心に聞いてくれる方が本当に増えてきていますので、やはり年配の方ではなくて、これからやはりもっともっと若い方にぜひアピールをしていただきたいと思います。例えば静岡県出身の芸能人とか、そういった形で活用いただいて、もっと静岡はやはり日本一のお茶どころになりますので、静岡からやはり全国に向けて、静岡茶というよりも私は日本茶、お茶は体にいいんだよというのをぜひ発信をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。私からは以上です。

＜発言者２＞

皆さん、こんにちは。御紹介いただきましたＮＰＯ法人団体の代表理事を務めさせていただいています発言者２と申します。よろしくお願いします。

今日は、先ほど発言者１さんから御紹介いただきました「藤枝おんぱく」というものを紹介したいと思っているんですけれども、うちのＮＰＯは持続可能な地域をつくるということで、実は藤枝市を中心に中部エリアで活動させていただいています。特に藤枝市を中心に活動しているんですが、「藤枝おんぱく」というのを昨年の春開催させていただきまして、藤枝市さんの主催で、うちが運営をさせていただいたんですが、藤枝温故知新博覧会の略が「藤枝おんぱく」なんですが、まちづくり型観光という分野の事業なんですね。そういったものを主に取り組んでいまして、それ以外にも蓮華寺池公園での朝市でオーガニックマーケットの運営事業などを行って、若手農家さんの流通販路ということで、そういった運営も担っています。

「藤枝おんぱく」なんですけれども、今回まちづくり型観光ということですね。一言で言いますと、地域らしさを味わえる体験型プログラムです。地域というフィールドで、地域の方が主催して開催される、一定期間にいろんな体験プログラムが藤枝市内で開催されるという体験型の総合イベントといったような形になります。パンフレットを見た方もいらっしゃるかもしれないですけれども、何か聞いたことがあるかなという方はいらっしゃいますか。まだ知られてないようですけれども、藤枝市内では回覧板でも回させていただいたりしたんですが、もうちょっと頑張らないといけないですね。

実はこの「藤枝おんぱく」の一番の特徴というのは、市民の方が主催者になって、その土地の魅力を発信していくというところなんですね。ですので観光事業者が観光をやるのでなくて、市民の方が観光というか、歴史めぐりだとかいろんなプログラムを主催してい

くというものです。

２つ目の特徴は、地域資源を新しい視点で切り取っていくということですね。なので、地域の方がその住む地域を見つめ直す機会になりますし、見つめ直して実感を持っていいなと思ったものを、また観光としてほかの人に伝えていくというような内側と外側に向けて開催しているイベントになります。

こういったまちづくり型観光、特に観光というと、なかなか志太エリアでぴんとこない方も多いかと思うんですけれども、こういったことに取り組んでいる理由といいますと、観光というのは昔、第三次産業のサービス業に分けられたと思うんですけれども、今は一次産業、二次産業ですね、そういったところの課題を解決する第三次産業まで貫くような横断的な力を今持っています。そういった意味でまちづくり型観光というふうに言われているんですけれども、まちづくりと観光を同時に行うことで、地域住民発信の歴史や文化だとかお茶産業だとか、本当のそういった地元の発見ができるというところに注目しています。

そういった取組を私は以前藤枝市の観光協会に在籍していたんですが、地域の中をいろいろ取材させていただきますと、本当にお茶の文化、伝統技術とか、本当に魅力的な方が本当にたくさんいっぱいいます。本当にこういった方々に出会うような観光をつくっていきたいなと思う一方で、産業はすごく低迷していたり、文化が自然消滅してしまっていたりとか、伝統技術の担い手がほとんどいないというような、目の前に結構大きな課題が山積みだというのも、未来に向けて細々と道が続いているような感じも受けたりすることがあります。

そういった現状を実感して、いろいろお話を聞くたびに、本当に地域に人材を引き寄せていくような仕組みづくりが必要だと思っています。つまり地域コーディネーターとか、いろんな縦割りのシステムではなくて、横の中で動いていけるような活動ですね。特にすごく世界に出ていって帰ってきた方だとか、県外で活動している若者だとかに共通しているんですけれども、すごく広い視野で、グローバルで、すごく新しい視点でローカルの文化を発見できていく。そういった人をもっともっと地域に呼び込むというか、引き寄せていくことが重要だなと思っています。

私もそういう一人といいますか、ちょっと自画自賛になっちゃうんですけれども、県外に出ていって帰ってきて改めて地元のよさというのをすごく感じた一人なんですね。今静岡のＵターン率がすごく低下しているということなんですけれども、若い方がそういった

まちづくり会社、ＮＰＯという団体で、それを仕事として活動して、地域の中で横断的にいろんな産業をつなげていくような仕事、そういった雇用といいますか、そういった仕事がもっともっと増えていくと、多分各分野で悩んでいらっしゃる方々の悩みというのは、実は横の風穴を開けていくことで解決することがすごくいっぱいあるんじゃないかなと感じています。これは本当にそういうのを活動している中で肌で感じることで、実際に地域の話を聞くたびに、そういった役割を担う若い方だとか、そういったものを仕事としてできる方がいらっしゃれば、本当に地域のいろんな活動が展開していくと思っています。

農業だとか茶業、そして林業、いろんな話をさせていただくんですけれども、どこも悩みが同じでして、すごく縦割りで、なかなか横のつながりが持てないというのがあるんですね。なので農業、茶業ですね、特にこの流域はお茶の都構想というのもあって、大井川流域はお茶をすごく重点的に県の方でもやっていただいていますので、そういったところだとか食文化、歴史、そういった分野をつないで、地域でイノベーションを起こして、まちづくり事業の会社が新しい地域ならではの仕事として確立していくような大きい動きをぜひつくっていきたいと思っていますし、ぜひつくって、県の方の動きの中でそういった動きをつくっていただけるといいなと思っています。

既存の今静岡県内でもまちづくりＮＰＯとか、そういったものはすごく少なくて、あまりないですね、活発に動いているというところは。そういったものはいろんなＵターンして戻ってきた方の活躍の場にもなりますし、最終的にはそういった方、グローバルビジョンに取り組める方がどれだけいるかというのが地域の力になっていくのではないかなと思っています。

地域の魅力もまちづくりも、観光の最大の資源はすごく人だなというのは、私はいろんな方に出会って感じています。そういった人材を地域に引き寄せること、そこには柔軟な発想、豊かな受け皿のある組織、行政以外で活躍できるまちづくり会社や活動団体やＮＰＯというものが、すごく地域のそういった柔軟な人材を引き寄せる核になるかと思いますので、ぜひそういった、市民活動といいますと、そういうものを本当にプロフェッショナルにやっていけるような活動団体の育成、そういうものを見守っていただくようなことをぜひぜひ進めていただけるとありがたいなと思います。

＜県知事＞

どうも発言者１さん、発言者２さん、ありがとうございました。藤枝を代表する若い青

年、男女共同参画でそれぞれの取組を御紹介いただきましてありがたいと思いました。1791年に創業というわけですね。200年どころか220年たっているんですね。いやあ、やっぱりすごい伝統を持っているところなんですね。お茶として。

そして今、恵庭って行かれたことあります？恵みの庭と書くんです。北海道に飛行機が飛んでいます、全日空が。乗られましたか。あるんです。北海道便がすごい人気があるんですよ。北海道－静岡、静岡－沖縄も飛んでいるんです、ＡＮＡが。今ＦＤＡも札幌に飛んでいますけれども、千歳空港と札幌という大きな街の間を電車で行かれますと恵庭というところがあります。すごくきれいなところです。子育てで一時期有名になったところです。言うまでもなく北海道は酪農ですから、乳牛がいてミルクがおいしくて、そしてアイスクリームができるということですから、アイスクリームとこの抹茶というのは抹茶アイスクリームで、そういう上手に利用して恵庭と組んで藤枝のお茶、あるいは静岡県のお茶を北海道で、北海道 540 万以上いますからね、人口は。全員お茶を飲むというのが健康の元だと。

また静岡県は給食にミルク飲んでいるでしょう。あのミルクは体にいいです。ミルクかお茶か、給食はどちらも提供すべきでしょう。私はお茶だと。じゃミルクはどうするか。これは午前中に飲めばいい。皆様も牛乳とっていらっしゃる人いると思いますけれども、なるべく絞りたての牛乳飲むのがいいじゃないですか。

同じように、配達して大体順番に学校を回りますので、８時くらいから11時ぐらいまでに配達が終わっているはずです。ですから１時間目と２時間目の間、あるいは２時間目と３時間目の間、３時間目と４時間目、４時間目はたしか 11 時台ですね。ですから 11 時までに配達されているならば、仮に朝ご飯を食べないで学校に来ている子供がいるとします。そうすると４時限目になると集中力がぐっと低下しますので、牛乳１杯飲めば元気でしょう。

そして昼は必ずお茶を出す。藤枝は必ず藤枝のお茶を出す。それをやってます？これは焼津の方も、今日は市長さんもいらっしゃって、焼津の学校では給食は必ずお茶を飲む。それではパンが出たときはどうするか。紅茶ですね、静岡産の紅茶を出せばいいですから、それで先ほど発言者１さんがおっしゃったんですけれども、若い世代にお茶のよさを知らしめるのは、おいしいお茶の味覚を子供のときから知っていることが大事です。ですからこの焼津や藤枝はいろんな食材がありますけれども、このお茶は静岡県の代表で、特に藤枝では来月はお茶の全国的なイベントが開かれるんじゃないですか。発言者１さんのとこ

ろもそれに出られるんじゃないでしょうか。お茶サミットというのがございまして、全国からお茶の関わりがある方が藤枝に集合するということで、私ももちろん行きます。それでもちろん藤枝市長も来られます。それから和食をユネスコに世界遺産として登録せられました熊倉先生も来られます。もう代表団が全部来るので、これはすごい大イベントだというふうに思うわけですね。

それで、このサッカーも今Ｊ１、Ｊ２、Ｊ３がいますね。Ｊ１が清水エスパルスで、Ｊ２がジュビロ磐田で、Ｊ３藤枝ＭＹＦＣでしょう。サッカーとお茶というのは、だからお茶とスイーツ、お茶とミルク、お茶とアイスクリームと、これお茶とスポーツというのを、何かサッカーでやるというわけですから、まあともかく藤枝東から始まって、この藤枝というのは何しろサッカー王国を代表する静岡県の本拠地ですので、それとお茶がもしうまく結びつけば、サッカーのすべての選手がお茶をおいしく飲んでいるという、ともかく楽しみにしたいということで、こういう若い青年が 200 年以上の伝統のある茶商の責任者として活躍されているというのは頼もしい限りだと思った次第でございます。

それから発言者２さん、本当に活発で、まちづくり型の観光と、さすが藤枝と思うんですよ。この間藤枝の商工会議所というか、青年会議所で、何かスマイルキッズ何とかというので、武道館を使って、藤枝のまち全体を子供たちが自主自営でやっていくというのをやっているでしょう。ここはできるんです。焼津や藤枝は、また自然豊かでできるんです。これからのまちづくりは、これは自然を生かしながらやっていく必要があります。

お茶畑が借景になったり、あるいは南アルプスが借景になったり、あるいは蓮華寺のああいう美しい里山の景観を借景にしたりして、自然と人々の生活とが、建物も含めてですけれども、一体感があるようにまちづくりをしていく必要があると。そしてまちそれ自体が観光の対象になるということが大事だと思うんです。もちろん藤枝のいろんなお祭りだとか、あるいはこういうお茶のサミットだとか、そういうイベントを通して観光にお越しになるというのもそうなんですけれども、いつ来ても春夏秋冬、その生活の景観それ自体が何とも言えずいいと、また来たいと。

そしてパークホテルに泊まるとか、昨日私そこに泊まったんですけれども、朝ご飯がおいしくて、昨日夕ご飯は「日本酒」がうまくて。

ともかく食材と、それからまちの景観ですね、人がお越しになる、そこのまちの最高の食材を、必ず食事しますから、そして食事の後に、お茶をいただければ、こういうわけです。

ですからまちづくり全体をもって観光にしていこう。それを温故知新でやっていこうということで、それが「藤枝おんぱく」ですか。「おんぱく」は温故知新と。古きをたずねて新しくを知る、論語に書いてある難しいというか、よく使われる言葉ですが、藤枝にはちゃんと歴史があるから、古きをたずねてそれを現代に生かしましょうと、こういう話ですね。

私はこれをまちづくりに、海のある焼津から美しい里山、瀬戸谷コロッケなんていうのは椎茸が入っているでしょう、ああいうのが山の幸と、例えばそうですね、焼津であればカツオ節、焼津方式の、あれは世界に冠たるものでありますが、そこも昨日見てきたんですけれども、そういう海の幸から山の幸まで、こういう食材を通して人々は、その思い出をつくっていきますから、こういう形で観光していくといいと。それをまさにあのカツオなんていうのは 1,300 年前、つまり奈良時代に奈良の都に献上しているんです。それはもう記録に残ってきまして、だから奈良の都の貴族たちはタンパク質をそのカツオ節で、これは腐りませんから、これを削っていただかれていたということがわかるんですね。

こうしたことを私は学校で教えることが大事だというふうに思います。ですからその温故知新をなさっている発言者２さんだとか、あるいはお茶について詳しい発言者１さんだとかが、今どういうふうに焼津なり、あるいは藤枝がなっているかということについて、生きた知識をその子供たちに差し上げると。ここでしか学ばないことを見ていくと、それが実は北海道と恵庭でつながっていたり、あるいは奈良時代のカツオ節とつながっていたり、思いもかけぬ古今東西に広がる地域の財産というものに出くわすという、だから「藤枝おんぱく」はさすがこの地域がつくり上げたそういう試みだなと思った次第であります。

そしてこの大井川の恵みで、この大井川に今度トンネルが通るということで、皆さん心配しているわけですね。これはしっかり心配する必要があります。一方で、その水が流量が少なくなるとか、あるいは生活水に汚れが出てくるとかいうようになれば、これはすぐに抗議をしなくちゃいけませんけれども、同時に大井川の恵みを大事にするというのは、大井川でつくっているものを使うということです。この大井川の恵シャツです。そういうこちらでつくっているものを地元の人が使うと。これを誇りを持って使うと。これがやがて人々が来たときに、それが日常で最高のものを出せるということになると思います。

特にお茶はその中で大井川のずっと流域につくられてきておりますので、私はお茶の都ということを堂々と言えるのが、この大井川流域であると。もっとも静岡県全体がそうですけれども、茶どころの中の茶どころというのを、この地域も言えると。やがて富士山静岡空港を中心にまちをつくり上げていくと思いますけれども、そのときにこの地域全体が

世界農業遺産、この藤枝、焼津は入っていませんけれども、掛川と菊川と島田と牧之原、川根本町ですね、しかし実際は茶草場的な茶の品質をよくするための茶栽培というのは全県下でなされているんです。ですからこれを私は世界農業遺産を、西は天竜から東は御殿場の方にまで広げていくつもりでおります。

ですからこの世界農業遺産的なレベルのお茶を栽培していると。その飲み方も、飲む量も、これを日常でやっていますと、本当に茶の都だというふうに言われるようになると思うんですよ。ですから、今日御提言があったまちづくり型の観光というのは、最終的には食の都、茶の都というそういう都ぶりをつくっていくことになっていくというふうに思っております。そんなことで、我々がやろうとしていることを地元レベルで応援してくださっている２人の青年の話が頼もしく聞こえたということでございます。ありがとうございました。

＜発言者３＞

お隣焼津市の大井川商工会の発言者３と申します。本日はお呼びいただきまして、また発言の機会をいただき大変ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

当大井川商工会は、焼津市の大井川地域、旧大井川町にございます。企業及び商店の方々600 余りの事業所の方に参加していただきながら、経営改善や経営方針等の支援により、会員の方々の力になるようお手伝いや情報提供、またイベントの開催など、各種イベントへの情報発信を行っております。

昔ながらの商店街、また何々通りといった商業形態が大井川地域ではなくなってしまいました。商工会がそれにかわる存在となり、地域を盛り上げていこうと、さまざまな機会をチャンスと考えて取り組んでいこうと常々考えております。

今現在、志太中央幹線の一部として大井川にはばたき橋が完成し、相乗効果として、下流の富士見橋、あと太平橋の慢性的な渋滞が解消されまして、各所へのアクセスがよりスムーズになりました。また平成 28 年３月までには大井川地区に東名高速道路に新たにスマートインターチェンジが完成いたします。これにより、より便利になります。また大井川には港があり、富士山静岡空港もより近くなりました。逆を考えれば、遠くの方も来やすくなったわけですので、これをチャンスとして注目していただき、出かけるよりも、来ていただく、大井川に寄っていただく、焼津に寄っていただく利用が多くなればいいなと考えております。

そのためには注目される物の開発や、他地域への情報発信、さらには幹線道路周辺及びスマートインターチェンジ周辺の活性を促すための開発等、商工会だけではできないさまざまなことがございます。地元焼津市や県の皆様のお力をいただきながらクリアしていきたいと思います。このような問題が山積みになっております。これからも地域活性のために商工会として頑張りますので、ぜひとも県としても様々なお力添えをいただければと思います。以上です。

＜発言者４＞

焼津から来ました発言者４です。よろしくお願いします。私は御存じの方も多いかと思いますが、よくテレビに出てまして、深海専門漁師というものを父親と二人でやっております。

数年前から深海とか深海魚のブームが起こってきたのかと思うんですが、昨年放送されたＮＨＫスペシャルのダイオウイカとか、それに並行して放送しました深海サメ報告というＮＨＫスペシャルとして５年間何も食べなかったダイオウグソクムシというものが話題になって、ブームになったと思うんですが、私たちは主に深海の、深海魚といいますと、皆さんグロテスクとか、気持ち悪いとか、そのようなイメージかと思うんですが、我々は深海でも海底にいる、本当に底にいるものを専門に捕っております。

キンメダイも深海魚になるんですけど、キンメダイは中層になりますので、サメを獲っているんですけど、それは昔おじいさんのときから捕っていまして、健康食品の深海鮫エキス肝油というものの原料となるため、健康食品の会社に昔から卸す仕事をしています。

ですけど、記憶に新しいと思うんですけど、2009 年の８月 11 日の駿河湾で震度６弱の地震ですかね、焼津沖が震源になりました。あれを皮切りに一気に海底が変わってしまいました。そのとき焼津市でやっていました深層水の取水口が、潜って調べたら２キロも飛んでいたという、そのような状況が海底では起きていたということで、我々にとっては本当目に見えない被害が 2009 年から起こっております。

ですけど不思議なことにその地震の予知が実はできてまして、大きな地震の前に必ずサメが大量に釣れるという現象が起こっていまして、8.11 の４日前にも異常なぐらいサメが採れました。日付は忘れましたけど、富士宮でしたかね、何か大きな被害があった地震のときも、数日前にサメが大量に捕れました。実は 3.11 の４日前にもサメが大量に獲れました。しかも、それが同じ場所で同じような現象が起きまして、偶然とは思えないんですけ

ど、そのように深海のサメ、深海にいる生き物ですね、そのような特殊な能力を持っているということで、まだまだ深海には何か研究していく可能性があるんじゃないかなと思っております。

私から県の方に要望といいますか、食の話になるんですけど、今マグロとかが規制されて､船の数が減っていったりとか、漁獲量を制限されたりとか、いつか食卓からマグロが消えるとか言われておりますし、ウナギも絶滅危惧種に指定されるとか、されないとか、そのようなことが今後、現在食卓にある魚がなっていく可能性はあるかと思います。駿河湾は日本で一番深い湾でもあり、大きな川が３つも流れていて、栄養豊富で魚種も恐らく日本一だと思います。その中にはやっぱり多く資源があると思います。

未利用魚ですね、利用されていない魚、漁師というものは、売れない魚は釣れても海で捨ててきてしまうのが現状でありまして、そのようなものをいかに今後活用していくかというようなことを、せっかく焼津には水産研究所等ありますので、そのようなところで何か代替になるようなものが海にまだあると思いますので、そのようなものの研究等していただければ、漁師、最近魚価の低迷等、苦しくなっておりますので、今まで捨てていたものがお金にかわる、そのようなことになれば、漁師の励みになりますし、高齢化ということで若い者が、漁師の後継者も減ってきていますので、何かそのような未来につながるような魚種といいますか、生物が見つかればと思っておりますので、そのようなことをお願いしたいと思います。以上です。

＜県知事＞

今回は発言者３さんと発言者４さん、焼津の現状を御紹介いただきました。
いろいろと御活躍いただきましてありがとうございます。先ほど言いましたこれは焼津の恵シャツ、大井川の恵シャツですけれども、今、夏のクールビズはサムライシャツ、これは遠州木綿を使って、そして扇子が入るように、６月から 10 月までクールビズの期間、議会でも着用可能ということになっているわけです。ところが、これちょっと高いんですよ。それでそう簡単に手が出ないということがあります。

それでこれ大井川の恵シャツは色違いのものがあるんですが、私これを最近公式に着ていったのは、実はさっき発言者３さんが一番冒頭会ったときに、「大井川の恵シャツ着てくれているの、ありがたい」と言っていただいて。

今日県議会の先生が来ておられますけれども、こういう魚河岸はちょっと襟がないので、

少しフォーマルには着られませんけれども、襟があると。それからまたお隣の島田にも帯シャツというのがありますでしょう。そうしたところでそれぞれのまちで、これをまちの夏の装いという形でお認めいただいたものは、ふじのくにのシャツとして来年度からもう少し選択肢を増やしていこうと。

今どちらかというと男性が着る方が多いんですけれども、やはり服装のセンスというのは、女性の方が圧倒的に、ご婦人方はそれぞれ色とりどりのものをお召しになっているので、そういう選択肢も増やさないといけないと。これも地産地消の１つです。

そして発言者３さんからは、こちらがもちろん売りに行くのもいいけれども、来ていただくということが大事だと。来ていただくためには交通アクセスが大切なので、150 号線だとか、あるいは東名のスマートインターだとか、そうしたものを整えることが必要だと。これはもう国内的にはそういうことです。

一方で国際的には空港というのがありますので、もうこの空港は 2020 年にオリンピックがありますけれども、そのときまでに駅をつくります。今年の９月に、この間議会が終わったんですけれども、今日ここに３人の先生がいらっしゃいますが、大賛成で予算が通りまして、できれば 2019 年ぐらいにつくっておこうと。

そうするといざというときに、例えば富士山が噴火したとするじゃないですか。そうすると灰がこっちに来ないですよ。皆東京に行きます。そうすると羽田空港が使えないわけです。もうこれは恐らく相当長く使えません。どうしたらいいのか。新幹線が回復したと。その新幹線のところにこっちに来てぱっと上に登ったら空港だというわけで、だからもう国のために役に立つんです。そうしておかないといけない。

つい数日前、富士山の噴火の訓練したじゃないですか。あれは国も参加されたんですよ。もし噴火すると、もう確実に首都圏に降灰が落ちます。灰が落ちます。場合によっては噴石も落ちるかもしれない。そういうことだと、もうプロペラが回りませんので、あるいはジェット機のエンジンが回りませんから、アイスランドで 2010 年、今から４年前に大噴火があって、近くにあるヒースロー空港は１カ月機能不全です。ヨーロッパ全体の空港は何十万便と欠航です、１週間以上。

これはもう決して冗談ではなくて、日本のために何がうちの富士山静岡空港ができるか。来やすくしておかないといけないと。上がればすぐに帰れる、来ていただけるとかというふうにしていかなくちゃいけない。ですからこの地域は国際的な玄関口を持っている地域に 2020 年までにはなるということで、発言者３さん、そのためにしっかりまちづくりをし

たいということであります。

それから発言者４さんの話は極めて興味深かったですね。やはりうちは農作物が 339、海産物が平成 23 年度の数字ですけれども、商品になったお魚の数が 100 品種です。ですから 339 足す 100 で 439 の食材があるんですよ。この数字は覚え方があります。三三が九、339、ちなみに富士山は日本で一番高いでしょう。

そんなわけで、海産物はちょうど 100 だった。ただし今、発言者４さんがなさっておられるように深海に棲むお魚、これをたまたま未利用であった。まだ利用していないお魚、未利用魚ということで、こうしたものの可能性を探れということなんですね。全国に名の知られている発言者４さんではありますけれども、これだけでなくサメの動きが 8.11、あれで我々は危機管理を重視するようになったんですが、その数日前にサメに奇妙な動きがあったと。この間も 3.11 の前にもあった。その４日後、３月 15 日に富士宮で地震が起こって、ちょっとした騒ぎになったんですけれども、富士山がひょっとすると爆発するんじゃないかと、そのときにもあったというわけでしょう。ですから深海について知識を積むということがすごく大切だと。

そしてまた今お魚が、多くの方々が日本食に憧れて、結果的に皆寿司とか刺身とかを食べるようになったために、日本食が世界無形文化遺産になっただけでなくて、逆に日本人しか食べないと思っていたローフィッシュですね、生のお魚をしょうゆをかけて、特に静岡のワサビをつけてやると、これ最高ですよ。そこに日本酒でもあれば、これに勝る贅沢はないですね。

そういうことになって、全国的に全世界的に日本食が健康志向で注目されている。深海魚が健康志向にぴったりとそういう栄養を持った、成分を持った魚がいるということですから、そして水産研究所の話が出ました。今度それつくります。これはもう焼津の市長さんと一緒に考えながらつくって、そこに研究所だけでなくて、子供たちが来る、社会人が来る、民間の人たちが来れるような施設もあわせて持ちたいというふうに思っております。これは浸水域のところにつくりますけれども、そこで働いている人が逃げられるようにつくるということです。

その意味で、焼津の漁港というのは、多くの防災担当大臣とか、国交大臣とかが今まで何度も来られて視察をされておられますけれども、着実に防災効果が上がっております。今度新港のところには荷さばき場、あるいは冷凍、これを新しくつくり直しますし、これは今古いからということがありますが、それからまた石油タンクが３つか４つありますよ

ね。あれがまちの中に流れたら大変ですから、それが流れないような、そういう命の丘みたいなものをつくります。

ついこの間は市長さんと御一緒に石津浜ですか、あそこがもう見事なきれいな、どのぐらいありますかね、ほぼ１キロぐらい、幅は優に 50 メートルはある、すばらしい富士山が眺望できるデートコースになりました。心のときめきと、それから体の生き生きと両方楽しめるところもできて、それが平時と有事の両方役に立つようになっているんです。

ですからそのうちに私どもの震災について、ひょっとするとマグニチュード９というすさまじいものが来るかもしれないと。皆様方御存じですか。東海地震はマグニチュード８なんです。マグニチュード８なんですよ。これはもう 1979 年、そのぐらいのときからずっと 34，5 年間、２兆円ものお金を投じてマグニチュード８級のものに対しては 90％、もう防災対策終わっているんです。ただマグニチュード９というのは、静岡県は襲われたことがありません。ただそれは 1,000 年、1,500 年に１回来るかもしれない。その準備をしているわけです。

こちらは起こったことが１度もないマグニチュード９について 1,500 年に 1 度ぐらい起こるかもしれない。それに対して我々は、向こう 10 年以内に犠牲者を８割減らすということでやっているわけですね。そうするとこれほどに防災に取り組んで安全なところはないということになりますよ。

そんなことで、その域内でそれぞれ御自身で安全などを考えてやっていらっしゃるというのは健康なことです。行き場がない。こういう一体感を持ってやっている地域があるというのは、誠にもってめでたいことだということを思うので、それは地域中心エゴじゃなくて、広域的な安全も一緒に考えるということであります。

そうした中で、その深海の持っている可能性を、しかもそこには大井川だ、あるいは安倍川だ、富士川だ、さらに狩野川もそうですね。この駿河湾に流れ込んで、こういう淡水、いわば日本を代表する大河川の栄養分を持ったものと、その海と交わるところ、汽水域ですね、そこに栄養分がものすごくありますので、結果的にそれがたくさんの魚介類を生むことになっているわけです。しかも日本で一番深い 2,500 メートルですから、この可能性はこれから水産技術研究所などと一緒に探っていくことをお約束したいというふうに思います。皆様方もぜひその点、発言者４さんのいろいろな御提言に、あるいは御発言に注目をしてくださるようにお願いを申し上げて、とりあえずの感想といたします。ありがとうございました。

＜発言者５＞

皆さん、こんにちは。「せんたく日和」という市民団体の代表をしております発言者５と申します。

こちらにいらっしゃる皆様の中で、一番何をしているのかわからないと思いますので、簡単に自己紹介をさせていただきます。私と一緒に活動してくださっている皆さんは、みんな子供が大好きな皆さんです。私にも２人の子がおりますが、今いる子供たちだけでなく、未来の子供たちのためにも、やっぱりその子たちが笑っていてもらいたい。そのためにはいいものを大切に残し、悲しみや苦しみは私たちの世代で片付けていきたいなと思っています。

じゃ何で「せんたく日和」という名前がついたかというと、私たちは今たくさんの情報やうわさや、それにくっついた憶測などもたくさんあります。その中でそれらを鵜呑みにせずに、私たち子供を育てている大人たちが自分の力で考えて選ぶという意味の選択、これを毎日しているということで、自分の力で頑張り選択できるような力をつけることが、これからの子供を守り、育てることのために必要なのではないかというふうに思って「せんたく日和」という名前をつけました。

また選択肢というのは、いいか悪いかだけではなくて、だれかにとって悪いことが、だれかにとっていいことであることもあります。また逆に、自分にとって嫌なことが、だれかにとってはいいことである場合もあります。だからあの人は嫌だとか、この人は嫌だとかじゃなくて、それでもいいじゃないか、自分と違う選択する人もいるんだと認めることで、相手を認めて、争いをなくすことにもつながっていくんじゃないかなという気持ちを込めて、私たち毎日選択をしていくよ、毎日が選択日和だよという気持ちで「せんたく日和」という名前をつけました。

子育て支援という言葉が、今よく聞かれるんですけれども、それがだれのため、何のためであるかということがすごく重要だと私は思っています。子供を育てる親が安心して預けて働きに出られるということだけでは、子育て支援とは言えないということを思っています。子供を育てることもそうですし、親だけでなくて、地域の皆さんが子供を見てくださっているということは、すごく大事なことだと思っていて、働く方たちだけが支援を受けられればいいと思っているわけではなく、働かないで子供を育てている、家庭にいるという人たちも認められる世の中であってほしいなというふうに思います。

女性が一度家庭に入って再び働くことを社会復帰という言い方をすると思いますが、私はこの言葉にすごく疑問を感じていて、子育てに専念することとか、家庭が円満にいくようにすることは、社会生活ではないのでしょうか。私は子供を育てたり、家庭を守っていくようにしていることは、十分な社会生活だと思っているので、ぜひそういうお母さんたちとか、おうちにいらっしゃる方たちも認められる世の中であってほしいと思っています。

子供たちには自分の生まれ育ったところを誇りに思ってもらいたいというふうに思っています。大人って格好いいなとか、早く大人になってあんなふうになりたいなとか、あの人みたいなことをしてみたいなって思って育つことというのは、すごく夢のあることだと思っています。ですので今皆様がおっしゃっていたようなことが実現できれば、子供たちにとって静岡県も焼津市も藤枝市も、自分たちがここで生まれたことを誇りに思えるようなまちができるんじゃないかなというふうに思っていて、今皆様のお話を聞いていて、とても私もわくわくしました。

お母さんたちは、やっぱり子供が産まれたことで、私も双子がいるんですけど、双子が産まれた途端、私は母になりました。で、「この子泣いているけど何で泣いているの？」と聞かれたとき、私わからなかったんです。昨日産んだ子が泣いているけど、私は母親で何でと聞かれてもわからなくて、それを全部自分で抱えなきゃと思ったとき、とっても辛かったんです。だけど、だんだん子供と一緒に自分が育っていって、だんだんわかっていくようになって、そして「せんたく日和」という市民活動を通じて、いろんな横のつながり、縦のつながりができたとき、いろんな方のお話が聞けて、私一人じゃないんだ、みんないろんな思いを持っているんだというふうに思うことができました。

なので市民活動とか市民団体というのは、これから子育て支援をしていく上で、すごく大きな役割を持つことだと思います。保育園とかの整備もそうなんですけれども、市民活動している方たちの活動にもぜひ目を向けていただいて、一緒に皆さんで子育てしていけるような形になっていくといいなと思います。以上です。

＜発言者６＞

皆さん、こんにちは。発言者６です。私は７年前に認知症家族会「ほっと会」を、そして今年の５月にほっとな居場所“輪笑（わっしょい）”を立ち上げ活動しています。今日は、なぜ私が“輪笑（わっしょい）”という場所を立ち上げたのか。そして今の私たちが何を感じているか訴えていきます。

遠距離介護を経て、認知症の母と同居を始めた私はストレスで押し潰されそうになりま

した。とにかく仲間が欲しい。ただそれだけで認知症家族会を立ち上げました。現在会員は約 60 名、皆様御存じでしょうか、介護マークを県に提案した家族会です。月１回の大きな柱である定例会をみんなとても楽しみにしています。けれども会員の中にはどうしても仕事や介護でその定例会に参加できない人がいるんです。私は「ほっと会」の事務所のようなところがあれば、ちょこっと立ち寄っておしゃべりできるのにって思いました。これが実は“輪笑(わっしょい)”を立ち上げる一番のきっかけです。

そして、「ほっと会」も５年目を過ぎたころから、看取りを終えたり、施設入所をしたりして一人暮らしの方々が増えてきました。介護予防の大切さ、なかなか進まない地域包括支援センターの周知、本人と一緒に気兼ねなく行かれるところが欲しいなと言っていた会員の声、そんなことから私はますます気軽に立ち寄える場所が欲しいなって思うようになりました。

そんなとき私はふっと世の中を見つめたんです。すると「ほっと会」で見ていたことと全く同じことが藤枝市内でも起こっていました。少子高齢化が進んで、認知症高齢者や独居高齢者が増加しました。私が見ていた「ほっと会」は社会の縮図だったんです。世の中は一体どうなっていくんだろう、私に何ができるのかしら、やっぱり居場所しかないかな、そんな思いで“輪笑(わっしょい)”を立ち上げました。

“輪笑(わっしょい)”はふじのくに型福祉サービスの常設型のだれもが集える場所です。と同時に、厚労省で推進しているオレンジプランで推進している県内初の認知症カフェもあります。輪投げの輪に笑うという字を書いて、むりやり“輪笑(わっしょい)”と。みんながにこにこ楽しく笑いの輪をつなげて、そして広げていけたらなと思っています。

けれど、１つとっても残念なことがありました。“輪笑(わっしょい)”がオープンしたときに、新聞に記事が掲載されたんです。それはとってもありがたいことでした。ところが、その記事を見た、来てくださっていた方が、「認知症」という言葉が見出しにあったために、「私がまだ来るところじゃないよ」「私はまだ認知症じゃないから私はいいよ」と言って来なくなってしまったんです。

“輪笑(わっしょい)”はだれもが集える場所なんです。認知症の人でも、私たちもみんな子供も大人も一緒に集えるところなんです。初期の認知症の方はとってもしっかりしていて、計算などは私よりも速かったりします。どうか皆様偏見を持たないでいただきたいなと思います。そして認知症の周知、それから理解を徹底させて、偏見のない静岡県づくりをしていただきたいなと思います。

“輪笑”は居場所づくりの研修に参加した仲間と始めました。場所はベヴェルというギャラリーです。開催日時は水木金の 10 時から３時、利用料は飲み物、お菓子付きで 200 円です。ぜひ一度お気軽に遊びに来てください。12 坪のこじんまりとしたところですけれども、毎日楽しくおしゃべりをしたり、静岡市の御当地体操、でんでん体操を取り入れたり、アクセサリーコーナーなどもやったりしています。こういう自由な居場所が藤枝市になかったから、市長さんに手紙を書こうと思っていたけど、できたからうれしいよと言って通ってきてくださる方もいます。

ただ常設の居場所は家賃と光熱費がかかります。どのように捻出しようかと苦肉の策で頑張っていますけれども、なかなか大変です。藤枝市のふれあいサロンや、焼津市の町内会単位のサロンは、社協や各自治体から助成金があります。けれども“輪笑”のような地域限定ではない常設の居場所に対する助成金はまだありません。これからの地域社会に必要と言われている居場所づくりです。私たちの思いを理解して活動を継続することができるように、ぜひ支援を考えていただきたいなと思っています。

そして住民自らが立ち上げた活動を生かして育ててほしいと思います。「ほっと会」はみんなで元気になりましょうという思いでつくりました。“輪笑”は笑顔の輪を広げたいという思いで活動しています。藤枝介護福祉プランのスローガンは、「いくつになっても笑顔で藤枝」です。藤枝市の第５次総合計画の理念は「元気共奏・飛躍ふじえだ」です。

そして静岡県は健康寿命が日本一です。キーワードは「笑顔・元気」です。「ほっと会」も“輪笑”も、それから藤枝市も静岡県も目指しているところは一緒なのかなと思いながら活動をしています。これからも身の丈に合った活動を元気で笑顔で進めていきたいと思っています。以上で発表は終わります。

＜県知事＞

それぞれ焼津の発言者５さんとそれから藤枝の発言者６さん、共通していましたね。お一人は、産まれたばっかりの双子の赤ちゃんについて一人で最初悩んでいたと。そしてまた発言者６さんの方は、自分のご両親、どちらかが認知症でいられて、一人で苦しんでいたと。これをどう解決するかということで、それぞれ「せんたく日和」だとか、「ほっと会」“輪笑”、これを立ち上げられて、今その活動の一端を御紹介していただいたんですけれども、すごくいい話だったというふうに思います。

「せんたく」という言葉に込められた思いの深さ、豊かさというか、これは超一級のも

のだというふうに思います。何となく今は労働力不足で女性の方たちに活躍してもらわないと、日本の経済は立ちゆかないというところもありまして、女性が仕事ができやすいような環境づくりを男女共同参画でやっていくと。これも大きな流れなんですけれども、それだけが選択肢なのかというとそうじゃないと。やはり子供を育てる、主婦として夫を支えて、かつ子育てについて自分の持っている能力をできる限りそこに注ぎたいというのも選択肢の１つでなくちゃならない。どちらも選択としては対等だ。だから１つの選択だけを強制するというのはよくない。これは選択というか人間の生き方、これは自由というものを大事にしなくちゃいけないということなんですね。

そういういろいろな思いを語れる場所として「せんたく日和」という会を立ち上げられたということなんですが、私自身もお子様を育てるということほど、大切な仕事はないと思います。もちろん県庁においても、二十歳前後で入ってくる青年たちがいると。この青年たちが社会のために役に立つ公僕として立派になるために人材を鍛えていくというのが我々の仕事です。トップに立つ者も、あるいは上司の方々も、仕事は人材を育てていくということです。

また社会に送り出すために一生懸命勉強しなくちゃいかん。これも立派な人間として社会に巣立つようにということで、人材を育てるためです。保育園、幼稚園に行って社会活動、社会関係を学ぶのも、これは立派な人間になっていくためのもので、それ以前のときには家庭で子供をしっかりと育てていくと。その発達段階に応じてしっかりとおじいちゃんやおばあちゃんの、あるいは近所の人たちのいろんな人たちの知恵を借りながら経験を頼りにして一生懸命育てていく。これほどにしかし手間のかかる仕事はないので、これをしっかりするということは、これほどに尊い仕事はないということですから、仕事と子育てを両立させるという言い方それ自体がおかしいのではないですかと。ですから、子育てそれ自体がこれほどに大切な仕事はないというふうに見るべきだということですね。

それからよく親御さんを支援するために待機児童ゼロにしましょうということで、保育園をしっかり整備しろと言われて、はい、わかりましたと言います。待機児童をゼロにするというのは、親御さんが保育園の空きを待っているという、それを待機しているということですけれども、実際は５時に仕事が終わったらすぐにお子様を迎えに行くというのは、そこにあらわれているように、待機しているのは子供なわけですね。子供が親御さんを待っているわけです。だから待たなくて済むようにすると、一緒にいることでしょう。一緒にいるように仕事場でもできないかと。

ついこの間まで、皆様方のおじいちゃんぐらいの代では、サラリーマンはほとんどいません。ですからほとんどが家業でやって、子供はそこで育って、おんぶされたり、寝かしつけられ、あるいはお客様にいろいろと子供をあやしていただいたりしながら、子供や親の仕事や背中を見ながら育っていたわけですね。だからみんなで育てていたと言ってもいいと思います。それが職場に電車で行ったり、あるいはバスで行ったり、ともかく子供から遠いところで仕事をして帰ってくるので、仕事を見せられないことが当たり前になっているけれども、本当にそれが当たり前かということも考えていきたいという問題提起でもありました。

ですから私は知事室を子供に開放するから、そこを子供の預け場所にしてくれと。こういうふうに出ているわけですから、これは移動知事室です。移動知事室これ 35 回目です。昨日はこっちに泊まっているわけです。いわゆる公務出張ですね、もう 1,500 回超えてます。だからほとんど知事室にいないですよ。だからそこに子供がいて泣いていれば、いろんな女の方もいらっしゃるしね、お母さんもすぐ近くで働いているということになれば、お昼休みにあやしに来たりできるわけでしょう。そしたら知事室はともかく５階だからちょっと遠いので、西館の２階を子供預け場所にするということになりまして、議会の御賛同も得ましたので、この 12 月には初めて２階に子供を預かる場所もできます。これも子供と親を離さないようにするというそういう考え方です。

ですから子育てはやっぱりみんなでしていく必要があるし、そしてそのためにいろいろと知恵をもらわないといかんと。つまり先輩のお母様方の知恵を学ぶということが大事で、そしてそれを専門にしている人たちのことを保育士といいますので、お母さんになることが同時に保育士になることだとすごくいいことだと僕は思いまして、これは富士市と藤枝市で、お母さんになることが同時に保育士の資格が取れるようにモデル事業を興したら、このたび昨年度３人保育士になられました。

それは保育士になる方々は、学校で若いときに勉強して保育士になられるわけですけれども、これは実践をしなくちゃいけないので、実際に保育園に来ていると実習をされているわけですが、お母さんは自分の子供がいるわけですから、実習しているのと一緒です。そしてちょっといろいろな理論とか技術を学ばなくちゃなりませんが、それはビデオでもできるし、保育士の方がそこにいるから学べるので、お母さんになることが同時に保育士になるということだと、全員保育士になるので、お母さんになった人はですね、そういうふうなことを理想にしてやろうというふうにも思っているんです。ですから子供はみんな

で育てようという考えなんですね。

それから認知症というのは、今 400 万人ぐらいいらっしゃるんですよ。だけど潜在的な認知症は 800 万人ぐらいだと言われています。日本の人口が１億 2,000 万でしょう。そして高齢者、すなわち 65 歳以上というのは大体４分の１ですね。４分の１ということは、１億 2,000 万を４で割ると大体 3,000 万でございます。ともかく 70 代の後半とか、80 前後になるとそういう気がやっぱり出てきますわね。記憶力が薄れたり、体力も弱ってくるし、そうすると 3,000 万もいない。そうすると仮に 2,000 万としても、2,000 万のうち 800 万の人たちがその予備軍だとすると、もう２，３人に１人が認知症ということなんです。ですからこれは決して特別なことではないと。

だからこれは日常でどなたもそういうふうになる可能性があるので、その悩みを一人で抱える必要はないというふうに、この発言者６さんが「ほっと会」をまず立ち上げて、いろいろと悩みをお互いに言う会を月に１回立ち上げられた。しかしやっぱり居場所が必要だということで、水木金３日間、一定の時間立ち寄ればいい。居場所があるかないかないかというのはとっても大切なことで、行く場所があるということはとても大切なことで、自分になれるところというのを持つことがとても大切なので、ぜひ水木金、今場所をおっしゃったので、まだ後から詳しいことは発言者６さんにも伺って、ぜひ立ち寄っていただいて、そういう居場所にある場所が各地で幾つもでき上がっていくというふうになるのが望ましい。

この認知症は、何もこの藤枝や焼津だけの問題ではなくて、全日本の問題ですし、これはもう科学的にそういうふうなところもわかっている。しかしそうならないためにはどうしたらいいか。お茶を飲めばいいそうです。そして健康寿命というのがいいというわけで、だから体を継続的に動かすと、それからこういうふうに社会参加をする、つまり居場所があるところがあるといいわけです。それから食事に気をつける。だから食材を多様なものをバランスよくいただくということと、運動を継続する、そして社会参加をする、この３つが健康寿命が日本一になっている理由だということで、厚生労働省は静岡県の健康福祉部に最高金賞をくださったんですよ。

それだけじゃありません。私どもは介護マークというのをつくりまして、認知症の方を、御婦人が旦那様の、旦那様が御婦人の世話をするときに、公衆便所に行ったりするときに、介護マークというのをつけていれば、これはそういうことで入っていられるんですよということがわかるように、これも全国に広まりました。ですから私どもはこの問題をとらえ

ている最新県です。

ですけれども、しかしそれは行政のレベルであって、まだ本当に生活レベルというか、地域のコミュニティレベルでこの認知症の問題が十分に理解されているとは言えないという問題があります。ここにもそういう認知症の御老人を抱えていらっしゃる方がいられるかもしれませんが、これは当然いられても当たり前ぐらいの数がいらっしゃるということですね。

ですから我々は「産んでよし・育ててよし」といいますけれども、「産まれてよし・老いてよし」というそういう地域をつくっていかないといけないというふうに思うんですね。子供が産まれてよかったなというふうに思われるためには、やはり地域の人たちみんなにお世話になったということを老いたときに振り返って、本当によかったというそういう社会を一緒につくっていきたいものだというふうに思いました。ありがとうございました。

＜発言者６＞

今日この発表の前に、知事と一緒にお昼のお弁当を食べました。そのときに「ふじのくにづくり」というパンフレットが机に置いてありました。これを見たときに、今日話そうかなと思って、５分なのでやめようと思ったことを思い出したので、ちょっとそのお話をさせていただきたいと思います。

私は実家が埼玉で、埼玉からお嫁に来たんです。それで静岡県民の愛県心、県を愛する心という愛県心の強さにびっくりしたんですね。私の主人もそうですし、実は息子たちもみんな静岡県が大好きなんです。発言者２さんのお話にも静岡県のよさというお話が出てきました。それから発言者５さんのお話にも、生まれ育ったところを誇りにというお話が出ました。それでこのパンフレットには「日本の理想郷をつくる」って書いてあるんですね。

私は静岡県の強みは愛県心の強いことだと、これが一番の強みじゃないかなって思ったんです。それは愛するもののためにって頑張れるじゃないですか。だから県民の中には静岡県のために頑張ろうと思っている人がたくさんいるんじゃないのかなって思ったんです。だから、私もそうです、今ここに並んでいる人たちみんなそうだと思うんですけれども、そういう人たちを生かす政策とか県政とか、そういうところをぜひぜひお願いしたいなって思います。そうしたら本当に理想郷になると思いながらこのパンフレットを見ました。以上です。

＜発言者２＞

先ほど知事も触れていただいた茶の都構想というのが、ちょうどこの空港の駅の開設とか、いろんなものとリンクするのかと思ったんですが、食の都の仕事人の活動を結構、私もいろんな施設の方から聞いたりして、活発に店のところに看板も置いてあったりして、目にすることが多くて、茶の都構想に関しては何かまた、個人的には「おんぱく」のような、ぜひお茶をテーマにしたものと、実際にお茶が楽しめるようなものができていったらおもしろいだろうと思うんですけれども、それから観光の具体的なところをぜひ形にできたらいいなと思っていますが、いかがでしょうか。

＜県知事＞

まず食の都というにはちゃんと根拠があるんですね。長いこと日本の食糧問題というのは、食糧の安全保障という非常に堅い話があります。これは日本の食糧自給率が４割を切っていると。これはカロリーベースで見たときに４割を切っているので、これを４割５分、５割に上げるということを農水省や首相が言ってこられたんです。私は静岡県をあずかりまして、静岡県のカロリーベースにおける食糧自給率を見ましたら、皆様御存じかどうか知りませんけれども 17%です。いやあ、びっくりするでしょう。

そもそも本当に食事において大切なのは、もちろん必要なカロリーをとらねばなりませんけれども、大事なことは、それぞれの季節季節のいい、おいしい旬のものをありがたく頂戴することです。それで食材の数を勘定してもらったら農産物が 339 ありますと、海産物は 100 ありますと。それをほかの県と比べてどうですか。断トツで１位ですって。先ほど申したとおりです。439 あるわけです。２位は 218 ですから、ですからもう圧倒的なんです。食材の王国でしょう。

そして、この食材の王国、つまり日本一だということです。これは例えば日本海側とか北海道は、冬になると雪に覆われるので、こちらはもうさんさんと日照時間があって、そこでおいしいイチゴとかミカンを食べたりしているわけですね。ですから、これはすごい財産だと。

静岡県にはそういう食材をそれぞれの季節に採れるものを大事にしている飲食店があるはずだと。飲食店の数が２万件ある。２万件のうち１％、つまり 200 件くらいは恐らくそういうものすごく食材を大事にして、つまり日本的な四季折々のものを大切にしてお客様

に出されているところがあるに違いない。自薦他薦でやっていただいて、これをそういう食の専門家に選んでいただこうといって 200 件あるから、そんなことは聞いてなかったというふうな人が出てきて、今 370 件ぐらいあります。ここは皆安い高い関係なしです。それぞれの旬のものを使って、お客様に楽しんでいただいているところと。これを「食の都づくり仕事人」としたわけです。つまり食材を通じて、ありとあらゆる食材が全部そろっているのがここでしょう。

これで日本の和食を世界無形文化遺産にするということこそ、今寿司だとか天ぷらだとか、あるいは様々な日本の健康食が世界的に注目されているので、これをやってみたらどうかということで、じゃあ誰に頼もうかということで静岡文化芸術大学の学長にお願いしたんですね。

お茶についても専門家です。同時にお茶というのは茶の湯で、必ずお茶席がありますでしょう。食事が出ます。その食事の一番最後の、いわば最後のお茶を飲むのが、今のお茶だけ飲むという茶の湯の道みたいになっているんですが、基本的には茶懐石というのがあるわけですね。そういう食事と一体なんですけれども、そういう意味でその歴史に一番詳しい学長に書いていただいたら、日本の食というのは美しい、自然と調和している。

うちはきれいに季節ごとのものをお皿までちゃんと案配してやると、これはまさに自然というものと一体になった食文化だということで、ごはんをおいしくいただくための一汁三菜、それが日本の食。その一番の候補者が静岡が一番食材が多いと、日経のエッセイでお書きになって、つまり和食が世界無形文化遺産になったのは、静岡県のためにあるようなものだということだ。

それでいよいよ本当に食材が日本一で、それを活用する食の都、これは実際は仕事人というよりも、本当は家庭なんですね。それぞれの家庭でその子供たちに最高のものをお母さん方が、あるいは買い物に行く方が選んで、そして家族で皆楽しむと。これは給食も一緒です。それやらなくちゃいけない。そういう意味で食の都づくりができる場所なんです。

同時に、お茶については、全国の生産量の４割です。流通量が５割、一人当たりのお茶を飲む量が全国平均の２倍です。ですから文字通り茶どころの中の茶どころで、茶の都「茶都」と書いて杭州、うちと浙江省と姉妹関係にありますけれども、浙江省の省都、県庁所在地みたいなものですが、そこがこれはうちの人口より多いですよ、800 万ぐらいいるんじゃないでしょうか、そこが茶都といっている。

お茶については専門家がいっぱいいます。お茶の郷博物館というのが金谷にありますね、

島田にあります。あれは日本で唯一だそうですよ。そして世界のお茶についての研究所にあのお茶の郷博物館が出てくるんですよ。ですからすごい重要なところ、しかも空港からもうすぐでしょう。牧之原全体がお茶畑でしょう。その牧之原のお茶畑は世界農業遺産になっていると。

そういう意味でこの志太・榛原・中東遠、これが府中、商業町の静岡市と、それからものづくりのまちの浜松市と、その間にあって、この地域あたりが茶の都といったときに、見てすぐわかる地域じゃないかとは思いますね。

東部に行くと富士山の存在が圧倒的です。伊豆半島に行けば伊豆ジオパークということで、温泉だとか海の景色ということになりますので、ですから茶ということで、もし５つの地域、西部、志太・榛原・中東遠、それから中部、それから東部、伊豆半島の中でお茶ということで、それ自体を売り出そうということだとすると、こちらがその最大の候補地になって、だれもノーと言えないような、そういう特色を持っているんじゃないかということで、お茶の都づくりは、今茶の都づくり検討委員会というのを静岡文化芸術大学の学長を中心になってつくっていただいて、大体同じような考え方で御答申がもう出ましたかね。ですから、こちらの方に候補地が入ってくるので、ぜひ御協力いただいて、今度の全国お茶サミットなんかもそういう意味ではとても重要なイベントです。

ちなみに、世界お茶祭りというのを３年ごとにやっていますが、今はもう 30 カ国近いところから 10 万以上の人が来られるようになりまして､文字どおり世界性を持ってきました。今それは春の全国お茶祭りと秋の全国お茶祭りをやりまして、その春のやつ、ちょうど茶畑で八十八夜のお茶摘みがある前後の５月の時期に去年初めてやったんですが、それも空港の近く、それから牧之原のあたりを会場にしてやりましたので、その意味でもこの地域のお茶との関わりというのは、世界のお茶祭りでも皆さん認識し始めていると言っていいと思います。

＜傍聴者１＞

初めまして。知事に直接お会いできて光栄です。それで私は名乗るほどの者でもないんですけれども、焼津市から来ました一住民です。平太さんの一ファンです。これからも抵抗勢力に負けないよう、道理にかなったよい政治を続けていってください。影ながら応援しています。

＜傍聴者２＞

どうも御指名ありがとうございます。時間がないので簡潔に申し上げますけれども、今防災が非常に深刻なレベルに達して、南海トラフとか、それから東日本大震災ですね。これを契機に国の、細かいことはまた書面にまとめますので渡したいと思いますけれども、僕が提案したいのは子供向けの防災教育です。

僕は実はこの構想は 10 年前から考えていまして、子供に防災教育をするのは、確かに深刻な状態で子供のときに対応するのは非常に難しいんですけれども、子供のうちから楽しみながらと言うとおかしいですけれども、楽しみながら防災を教育しなければまずいなと、そういう認識でいます。それには簡単なタイトルをつくったんですけれども、「防災に働く車」、こういうものですね。防災のときに活動するさまざまな車、大体 30 台ぐらいを一遍に並べて、それを子供たちに見せながら、できればデモンストレーションしていただく。それに働く人たちが実際に子供と対話しながら、そのときに防災の最先端ですね、そういう技術もあわせて展示しながら、大人の人たちにもアピールしていく。それをできれば年に１回ぐらいやっていただけないでしょうか。こういう構想です。

時間もないですから、いろいろその内容は書いてあるんですけれども、ぜひこういう形で子供たちに防災に対する取り組みを、もう本当に小さいうちからアピールしながら、静岡県がこれから対処しなければならない南海トラフとか、台風ですね、それに対する備えを行政の方が一生懸命やられても、結果的には我々市民がみずから動かなければならないわけですから、その辺をぜひ御提案して、しかもそういうイベントは県下のみならず、まさしく日本のさまざまなところでやっていただいて、ある意味では人を集める効果にもつながるんじゃないかと、こんなふうに思っております。

＜傍聴者３＞

藤枝市天王町の傍聴者３と申します。この「ふじのくにづくり」ですけれども、今日の会に一言、まずもって富士山世界文化遺産の登録おめでとうございます。僕は 70 歳のころから地域の地名の勉強をしております。そして大胆不敵にも富士山に挑戦していますが、富士宮市が昭和初期に出した書物に、90 点ぐらい富士山の名前が載るような時代がありました。それでその後、私素人ですが、いろいろな文献を読んでいった中で、これは関連性があるかどうわかりませんが、古代から繁栄の神、あるいは水稲、米の神、そういうような答えが出てきました。

それで富士山という本を書店で読むんですが、１つも答えが載ってないんですよ。先日静岡県で出ましたが、あれにもないんですよ。それで僕が心配しているのは、なぜ富士山というんだと質問があったときにわからない。それで我々素人が幾らもがいてもしようがないものですから、できましたら静大とか、静岡文化芸術大学ですか、そういう学者の先生の力を結集して、静岡県で２年以内に何とかして、富士山がなぜ富士山というか、それを探っていただきたい。県知事さんにぜひよろしくお願いいたします。

＜県知事＞

どうも貴重なそれぞれ御提言、御質問ありがとうございました。まず防災教育はおっしゃるとおりです。子供のときからやっていく必要がありまして、我々もそのつもりで取り組んでいるわけですけれども、Disaster Imagination Game ディグというのが今ありまして、いざというときにどういうふうにするべきということを家族でお話ししていただくためのそういうゲーム感覚で防災力を高めるそういう方式が普及しているわけです。しかし全県下すべての子供たちにというふうにはなってないのは確かですね。裾野高校のように、高校３年生になると全員がジュニア防災士になっているというそういうカリキュラムを組んでいるところがあります。

私はこれは高校生だけでなくて、その高校生が家に帰ると、例えばタンスであるとか、いろいろな本棚だとか、こうしたものが留めてあるかとか、あるいはいざというときに持っていくものはどうなっているかとか、そうしたことが全部知識として入っているので家族にも役に立つということで、ジュニア防災士という静岡県独自の防災士の資格を高校ぐらいになると全員が持っていくようになれば、あるいは場合によったらそれを中学にまでおろしていけば、もっと広がるだろうとは思っておりますけれども、御趣旨はそのとおりで、先ほど１つの御提言もありましたけれども、我々はいわゆる防災の日ほか、さまざまな地域の自主防災組織もありますので、そうしたところを通じて、地域に防災感覚、防災の意識を高めていただくように、一緒に県も含めてやっているつもりでおりますが、恐らく藤枝、焼津については、私は防災力は非常に高いと思いますので、ぜひここらあたりを藤枝並びに焼津はこういう面で最も先進的であるという事例を今日は市長さん、県議の先生もいらっしゃいますので、ぜひそういう御期待に沿っていただけるようにお願いしたいと思います。

それから富士山の本は本当にたくさんあります。ただ富士という名前がどこに由来する

かというのは、ものすごく難しいですね。アイヌの言葉に由来するということもありますし、常陸の風土記には福慈（ふくじ）と書いてあったり、不死と書いてあったり、二つ並ばずと書いてあったり、いろいろな書き方がされている。いずれにしても、なぜ「ふじ」というふうに発音し、そのように呼ぶのかというのは、私はよく探すと研究書というのはあると思います、多くの方々の関心事でしたから。ぜひ調べられた結果を藤枝の会報にでも書いたり、あるいは新聞に出されるとか。富士の名の由来についてわからないことがわかったとか、それをもっと調べましょうとか、それなりの研究はされていると思いますけれども、まだ万人を納得させるものがないということかもしれません。そんな富士山の由来が、富士山の富士山たるゆえんかもしれません。

ちなみに、富士山の中心の地名御存じですか。地名。中心。ここだとちゃんと藤枝市何とかとあるでしょう。富士山の頂上の地名。ないんですよ。国土地理院というのがその地名は空白になっているんです。中心が空っぽなんです。こんなところは日本全国の中でここだけです。富士山のところだけです。決められないんですよ。静岡県なのか、山梨県なのかも決められない。不思議なことというのは、なかなかそういうのがあるというのも、何かいいような感じもしまして、人々になぜだろうということで、中が空、中空になっているんですね。そういう独自の存在でありますので、このなぞは日本人全体、あるいは世界中の人にとっても、これを解ければ博士号ですね。どうもありがとうございました。